

會津藩と新港港

渡 邊 轍

會津と越後との密接な關係に就ては既に「史苑」第十卷第二號誌上に於いて述べた。會津から越後に流るゝ阿賀川を會津川ともいひ、會津の米穀を集散し食鹽其他を會津に送る新潟港を俗に會津湊といつた程、會津と上越^{越後は國幅廣いから}は關係は深い。新潟は、上杉氏以來知られ、徳川時代には北國の重要な港として世に知られた。幕府は久しく長岡藩をして此港を治めしめたが、天保十四年、上知せしめて新潟奉行を置いた。安政以來は開港場に内定したから益々内外に其名を重らしめた。

元來、新潟に集散する物資は米穀の外、食鹽が大部分で會津藩が此地に求むる處も重に食鹽であつた。食鹽は中國地方の製産地、三田尻・尾ノ道邊から鹽州竹原港に集り瀬戸内海を経て一路新潟に來たもので、其額莫大なばかりでなく市内の食鹽問屋が口錢を得ることも少くなかつた。また湊法として仲金又は鹽入役と稱して、壹石につき銀壹兩二分、當時食鹽一萬俵で凡六十兩餘、問屋口錢百兩につき貳兩、外に藏敷料等を合算せば相等の額に上る。是は會津藩の常に苦痛とした處で、幾度か領内窮民の救恤とか蝦夷地廻航船の船足を重からしむための底荷等の名目で、無稅移出を企て進で自領内

(628)

に海口を求めんとした。

嘉永三年、會津藩は房總沿海の守備並に品川其他衛戍の功により、蝦夷地の一部を賞賜せられ、士卒を移して拓地及漁業に従事せしめたが、新潟を以て其發著地となし往航には米穀を、廻航には底荷と稱して彼地の鹽魚藻類を滿載し來り、其移出入に役銀の免除を請ふたが、湊法に反するものとして物議を招いた。また安政六年には食鹽三萬餘俵に役銀の免除を請ふ、これ長岡領當時食鹽に免除を得た例あるによる。文久元年には食鹽四萬餘俵に對し、文久以來は江戸・京都に文久二年會津京都守護職となる運送すべき米穀に對し並に役銀免除を請ふたけれども、新潟奉行古山善一郎は幕府に申して法の如く役銀を徴收した。

萬延元年、會津では領地の一部を上知し松ヶ崎邊を拜領せんと噂があつた。新潟港民は此噂に及びて、かくては會津の船が阿賀川を自由に往復すべきは勿論、延いては他の商船も之に倣はゞ新潟に取りて大問題であると、港民は奉行所に懇請し、奉行古山も幕府に其噂の實現せざらん事を請ふた。幸に噂は實現しなかつたが、文久二年八月、幕府は會津藩主を京都守護職に任じて職俸五萬石を與へ、更に元治元年には京都守護の功で會津に封五萬石を加へた。會津の意圖は今同こそ加封のうちで越後新潟・松ヶ崎地方を得たいと、公用人外島機兵衛直義を以て、幕府に懇請した。新潟は開港場其他で會津の懇請は幕府に容れられなかつたが、この時會津では新潟附近青山村以南二十餘箇村の新領

土を獲た。

茲に端なくも會津と新潟町民との間に交渉問題が起つた。平島村附近分水のことがそれで此問題は天保・弘化以來の事であるがこゝに至て再燃した。實際當時は藩原郡附近の村民は連年信濃川の支流の氾濫に困厄して居る事だから分水問題が起るのは當然の事ながら、平島村の東三里許の内野村の底地で幾分水されて居た新潟町民は今回の問題も分水以外、會津はこの門戸から必要品を阿賀川に轉送する魂膽にあらざるかと危惧の念を抱き、激昂して奉行所に訴へ、奉行所でも會津と交渉したけれど要領を得なかつたので港吏は出府して會津の堀割差止の訴狀を幕府に出し、在府中の新奉行榊原主計頭も之が爲に盡力し幸に此事は行はれなかつた。これ新潟港民と會津との間に鹽事件として知らるゝ事なるが、かゝる年來の關係から新潟港民の會津藩に對する感情兎角面白からず、且戊辰の役はじめに來た會津藩士も粗暴の行爲ありて港民に忌むる。後に來た會津の家老梶原平馬暴行兵を斬て軍規を示したけれど港民の意角解けなかつた。會津藩ではまたこの役のはじめに食鹽問題で、單獨新潟を占領せんとし、人を越後に遣はしたけれど食鹽の貯藏諸所に豊富であつたから新潟古領に及ばなかつた事は既に言ふた通りである。併し彼の勇敢悲壯の會津籠城史の一面に、かゝる重大な食糧問題があつたのである。

附記 本稿は新潟市史中にある新潟表記録に負ふ所大である。